

第3回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事要旨

1. 日時：平成26年8月18日（月）17:00～18:45

2. 場所：中央合同庁舎8号館13階1326会議室

3. 出席者

（1）構成員

平澤座長、榊構成員、相澤構成員、伊集院構成員、門永構成員、西澤構成員

（2）政府側

石原沖縄振興局長、藤本大臣官房審議官、岡本総務課長、橋本事業振興室長、中嶋企画官、新田専門官、原専門官、矢島専門職、田原専門職

4. 議事要旨

議事1 平成27年度概算要求に向けた議論について

事務局より資料について説明がされた後、構成員から以下のような主な意見があった。

- 3点検討する必要がある。①世界最高水準の研究大学を設立するという所期の目標が、何を根拠に予算措置をして、現在その目標としたところを達成してきているのか。②その上で、研究・教育面での大学力を強化して、規模拡大を図ることについての妥当性。③沖縄振興策との関連で、知的・産業クラスターを整備しながら拡充をしていくということについての妥当性。
- カリフォルニア工科大学（カルテック）のような世界最高水準の研究・教育環境にするために必要な予算規模として、PI50人、100億円を国が保証するということからスタートしたと考えると理解しやすく、日本が大きなチャレンジに踏み出したものと見るべき。実際にその方向でOISTが世界最高水準を実現しつつあるということが検討会のメンバーでもある程度確信が持てれば、次のステップを積極的に考えられるのではないかと。
- 2021年（国の財政支援の在り方等の検討時期）には、OISTがいかに自立しているか、いかに沖縄に貢献しているかという、ある程度のビジョンとか数値的なものを見せられるように努力しないと、このまま沖縄振興のためと言って予算が付くかどうかは分からない。OIST側もそういう自覚が必要。
- 沖縄の人たちにとってOISTがあつて良かったと思える具体的指標は何なのか。国際的に素晴らしいということなのか、それとも沖縄の産業振興なのか。どちらに重点を置いているのか、そしてそれをどう出そうとしているのかが見えない。
- 前回の検討会において、学長から、今までやったことのないアプローチで学際的研究に努力していることについての話があった。その成果を出すには時間もかかるし、規模も足りないという思いでやっているということと、沖縄振興のためにお金を使っているのだから、2021年に向けて成果を出さなければならないという期待値との

間にはギャップがある。

- 2021 年に向けて、知的・産業クラスター等の取組のスピードや具体性を進めていく必要がある。外部資金の獲得に向けた取組も積極的に進める必要がある。
- OIST を実際視察して、「これはいける」と実感した。新しい研究領域を開いていくという考え方が研究者に徹底されている。あくまでも世界最高水準の研究大学を確立し、その中から沖縄振興に結び付くものが生まれてくるような、大きなイノベーションの核になる必要がある。
- カルテックは過去の集積がある。OIST が定常状態として運用できるように、設備やポスドクの雇用も含め初期投資で積み増していかなければならない部分は急いでやらないと、いつまでもテイクオフできないという論理は成り立つ。
- 従来型の基礎研究と沖縄振興やクラスターとで、お金の出し方を変えることがあってもよいのではないか。
- OIST にはアクティヴな多様な研究者がいて、新しい試みが成されている。基礎的研究と出口を繋げる仕組みについてはいろいろなやり方があるので、是非沖縄で試してほしい。1 人の研究者の中でディシプリン型と出口を見据えた基礎研究（ミッション型）の両者を共存させている若い研究者たちも結構いる。社会経済的なミッションを持って基礎フェーズの研究をやる研究者を増やすことも必要。

(以上)